

岐阜県飛騨市種蔵集落における土地所有からみた 入会林野の空間構成

青柳 由佳

本研究は山間集落である岐阜県飛騨市種蔵集落において、1986-87年頃に作成された測量図を基に入会林野の土地所有を明らかにすることでその傾向を捉え、既往研究で明らかとなった土地利用を踏まえ、昭和初期から戦後（1955年）頃の入会林野の空間構成について考察することを目的とする。

種蔵集落の入会林野は種蔵集落に居住する世帯でエリアごとに分散所有されていた。また比較的小さい区画面積の所有地が多く集まるエリアと中程度の区画面積のエリアと、大きな区画面積を持つエリアが確認された。所有地は、かつてより個人所有が継承されたものと共有地を分割したものがあり、字家廻からの距離、標高、土地利用等によりエリアごとに所有地分割の差異が見られることが考察された。

キーワード：種蔵集落 入会林野 土地所有 集落空間構成 山間集落

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

山間集落では主屋が立地する周辺の耕作地だけでなく、入会林野を利用して生業を成立させてきた。本研究は山間集落である種蔵集落において各世帯の入会林野の土地所有を明らかにすることで、入会林野の空間構成を捉えることを目的とする。

岐阜県飛騨市宮川町種蔵集落は岐阜県の北部飛騨市にあり、宮川沿いに形成された段丘上に位置する標高約450-500mの山間集落である（図1）。現在、字家廻には15棟の主屋と21棟の倉が現存し、7世帯が居住している。

1-2 種蔵集落の概要

種蔵集落は1692（元禄5）年以降天領となり、飛騨国吉城郡小島郷に属していた。1875（明治8）年筑摩県（明治9年より岐阜県）坂上村種蔵となり、1879（明治12）年に岐阜県吉城郡坂上村種

蔵に、1956（昭和31）年に坂上村と坂下村が統合して宮川村となる。2004（平成16）年吉城郡の4町村が合併して飛騨市となり、飛騨市宮川町種蔵となった。

種蔵集落の主な生業は江戸時代より農業であり、当時稲作は僅かで畑作と焼畑によるヒエ、アワ、蕎麦、小豆の栽培が主であった。副業として江戸中期には既に養蚕を行っていた。明治になると養蚕に加え、富山平野に田仕事に馬を貸し出す作馬^{註1)}や炭焼きが盛んとなった。1946（昭和

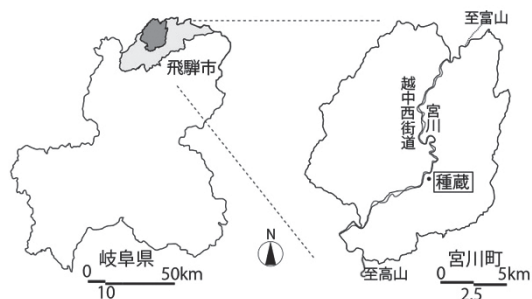


図1 種蔵集落の位置

21) 年に用水路を新設して水を引き、住民総出で棚田を造成して稲作の耕作面積を拡大した。その後焼畑、養蚕、作馬、炭焼きをやめている。住民によって作られた棚田は、2001年環境省の「かおり風景100選」に選定され、棚田の保全と地域活性化に向けて2008年に「板倉の宿種蔵」が開設された。現在は自治体と住民が協同で地域の保全を行なっている。

1-3 既往研究と本研究の位置付け

種蔵集落の既往の研究を見ると、山田¹⁾は考古学の立場より、種蔵集落居住者の空間認識について江戸時代の史料や現地で入手した入会林野の測量図に基づいて考察を行っている。本研究で入手した入会林野の測量図と重なる部分があり参考になるが、土地所有を明らかにした上での分析は行われていない。

彌田²⁾は居住域(字家廻、平岩、奥後、そで、山こし、山の口の6つの小字)を対象に2008(平成20)年の登記簿から世帯ごとの土地所有を明らかにし、土地所有の特徴を考察している。

筆者は字家廻周辺を対象に土地利用と土地所有より民家の配置を明らかとした³⁾。また入会林野の利用の変遷を明らかにし、民家に使われる建材の材種の変容との相関を考察した⁴⁾。本研究はこれらの研究で明らかとなった入会林野の土地利用に加え、入会林野の土地所有を明らかにすることで、種蔵集落の空間構成を捉えることを目的としている。

2. 研究方法

2-1 研究方法と資料概要

本研究は、住民の方より入手した1986-87年頃に作成された以下の6つの資料を利用した。資料は、入会林野の測量図であり、字名、所有者、面積が記載されている。聞き取りによると、測量図は助成金を受け、さらに種蔵集落住民で分担金を出し合い作成したという。また既往研究¹⁾では「昭和の末期にこのような測量図を作ったのは、保っている今の内に、自分たちの空間を確認しておこうという意識から実施した」とある。

資料に基づきCADソフトを利用して世帯ごと

に色分けを行い、土地所有を明らかにした。さらに既往研究で明らかとなった土地利用や現地での聞き取りに基づき入会林野の空間構成について考察を行った。現地での聞き取りは聞き取りが可能である8世帯に対し2014年9月～2016年8月に実施し、2017年8月、2018年11月に補足調査を行なった。

- ① 入会林野等高度利用促進対策事業調査測量実測平面図(杉山・笹めき・ツキド)
- ② 入会林野等高度利用促進対策事業調査測量実測平面図(ほうそが尾・蛇測)
- ③ 入会林野等高度利用促進対策事業調査測量実測平面図(谷・井ノコ谷)
- ④ 昭和61年度入会林野調査測量実測平面図NO.1(下あそ・中のこびり)
- ⑤ 昭和61年度入会林野調査測量実測平面図NO.2(あそ谷・いがき)
- ⑥ 昭和62年度入会林野調査測量実測平面図(山ノ口・桂谷)

2-2 研究対象範囲

図2は種蔵集落字全図⁵⁾である。本研究では字全図に示される範囲を「種蔵集落」とする。現存する15棟の主屋と21棟の倉が建つ範囲は小字「家廻」という。種蔵集落は字家廻の北東に位置するはまば山と南東に位置するあそ山からなる。本研究対象範囲は住民の方より入手した資料が示す範囲とし、字家廻とその周辺で耕作地が広がる地区の字そで、奥後、平岩、山こしとあそ山の字わなで以南とはまば山の字孫十郎尾、小屋が作、瀧ノ谷、大谷長尾、舟作、杉谷を除く。また、昭和初期から昭和30年代頃の種蔵集落には字家廻に23世帯、枝村である字大瀬に2世帯が居住していた。本研究では、絶えたといわれる一世帯を除く24世帯を研究対象世帯とする。

2-3 研究対象時期

本研究は入会林野が住民により利用された時期の集落空間構成を考察することを目的としている。研究対象資料は入会林野を利用していた当時を知る住民の依頼により1986-87年頃に作成されたものである。また本研究は利用当時を知る住民

から聞き取りを行う。入会林野は史料により遡ると江戸時代には広く利用されており、戦後（1955年）頃に焼畑や副業での利用が縮小した。現在は、森林組合が管理を行なっている。本研究の研究対象時期は、入会林野が利用され住民への聞き取りが可能な時期である、昭和初期より戦後（1955年）頃までとする。

3. 既往研究からみた種蔵集落の土地利用の変遷

3-1 江戸時代

1746（延享3）年飛騨国中案内⁶⁾によると、種蔵集落は「家数大・小二十三軒あり」とある。また江戸時代は天領であり、山々は御林山といわれ、幕府にとっては重要な収入源であり厳しく管理されていた。1844（天保15）年「御林山内取調理箇所附帳⁷⁾」より地目を見ると、字家廻から比較的近い林野は草山、焼畑とあり、比較的遠い林野は雑木立とある。種蔵集落の主な生業は農業であ

り、字家廻周辺の田は僅かで、畑で耕作すると共に入会林野で焼畑を行っていた。

3-2 明治大正時代

1888（明治21）年に作成された吉城郡坂上村種蔵組字絵図⁸⁾を基に当時の土地利用を表したものが図3^{注3)}である。江戸時代に引き続き字家廻から比較的近い林野は柴草山、焼畑があり、比較的遠い林野は木山^{注4)}、山林がある。江戸時代と比較するとあそ山^{注4)}のシャウジ谷の谷沿いにも焼畑が点在し、焼畑の範囲が広がっている。

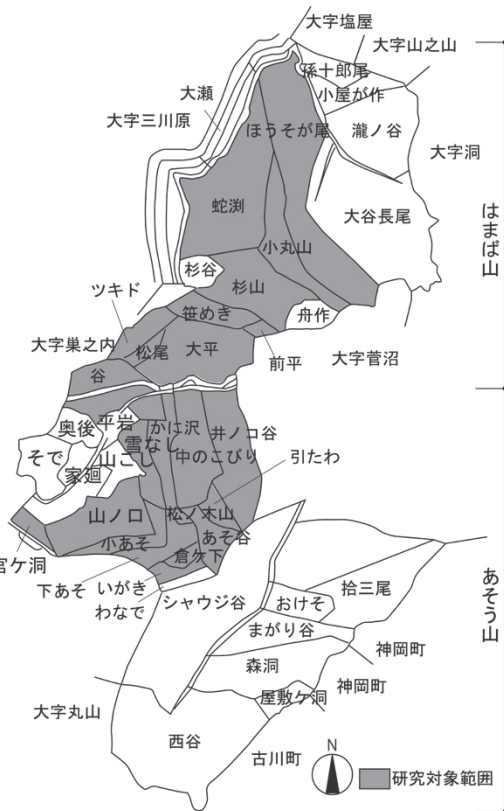


図2 種蔵集落字全図と研究対象範囲^{注2)}

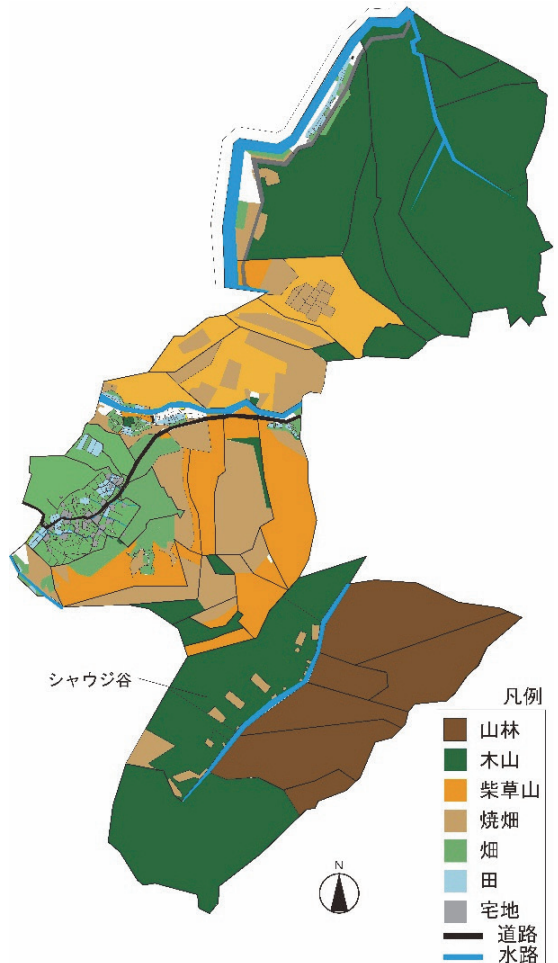


図3 1888（明治21）年の土地利用（吉城郡坂上村種蔵組字絵図により作成^{注3)}）

3-3 昭和初期から戦後（1955年）頃

聞き取りによると、あそう山の字家廻から近い入会林野では、副業である作馬^{注1)}に必要な馬の敷草を刈るためのカリバ^{注5)}（刈場）が広がっていたが、1955年頃は作馬の衰退により1970年頃にスギ等が植林された。戦前の字家廻の水田は4反程度であったが、用水路をつくり菅沼谷から水を引いて住民が総出で石を積み1950年頃に字家廻に10haの棚田がつくられた後、焼畑を1955（昭和30）年頃にやめている。山では副業として炭焼きも行ってたという。

現在の入会林野は、山林、保安林となり主に森林組合が管理している。

4. 種蔵集落の入会林野の土地所有

4-1 各世帯の土地所有

住民の方より入手した入会林野測量図を用い、種蔵集落に現在居住している世帯、かつて居住していた世帯24世帯を対象に所有地の色分けを行った（図4-15）。入会林野の所有は、世帯ごとに所有する場所に多少の偏りはあるが、各世帯でエリアごとに分散所有されているように見受けられる。よって本研究は、研究対象の入会林野を4つのエリアに分けて分析することとする。4つのエリアは、あそう山を字家廻に近い標高約600-900mのエリア（字：宮ヶ洞、山ノ口、雪なし、かに沢、中のこびり、井ノコ谷、小あそ、下あそ、松ノ木山、谷の一部）と字家廻から遠い標高約900-1,100mのエリア（字：倉ヶ下、いがき、あそ谷）に二分し、はまば山をきじや谷で二分しきじや谷北エリア（字：ほうそが尾、蛇測、小丸山）と南エリア（字：杉山、笹めき、ツキド、松尾、大平、前平、谷の一部）とした。各世帯について4エリア別に所有の有無をまとめたものが表1である。世帯No.23、世帯No.24は字家廻に近いエリアを所有していないが、これは字家廻に居住していない世帯で、種蔵集落の枝村である字大瀬に居住する世帯であるという要因と考えられる。

4-2 エリアでの区画と所有面積

4つのエリア別に、所有地の区画ごとにその面積を集計したものが図16である。4エリアの所

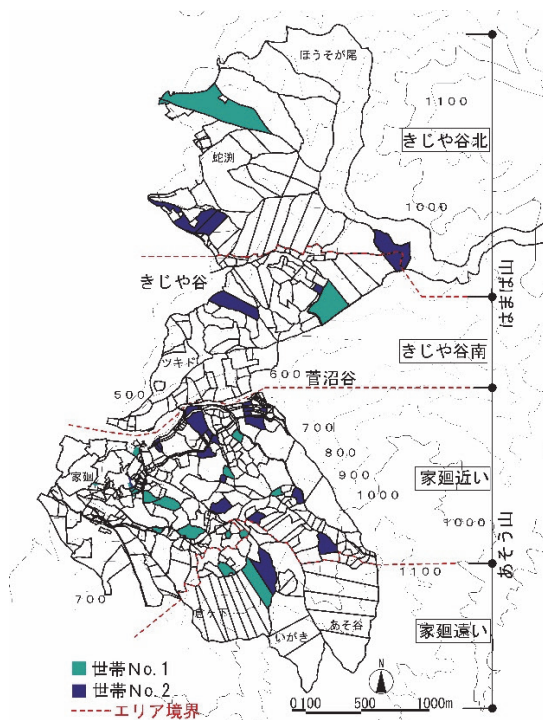


図4 世帯No.1, No.2の所有地

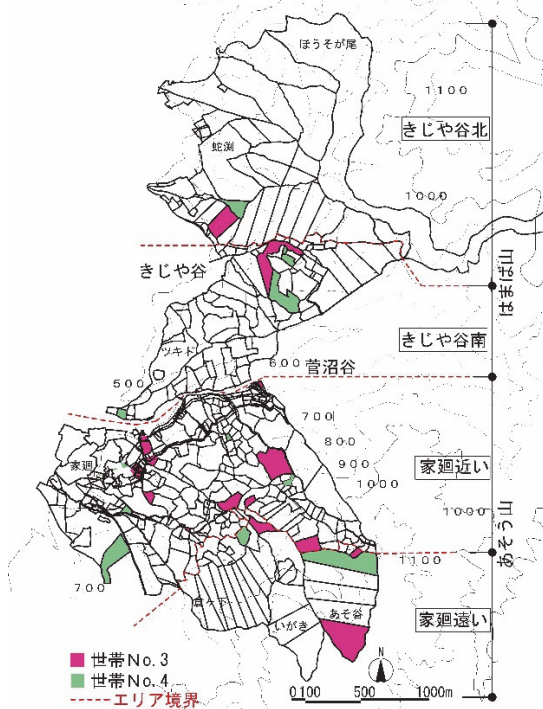


図5 世帯No.3, No.4の所有地

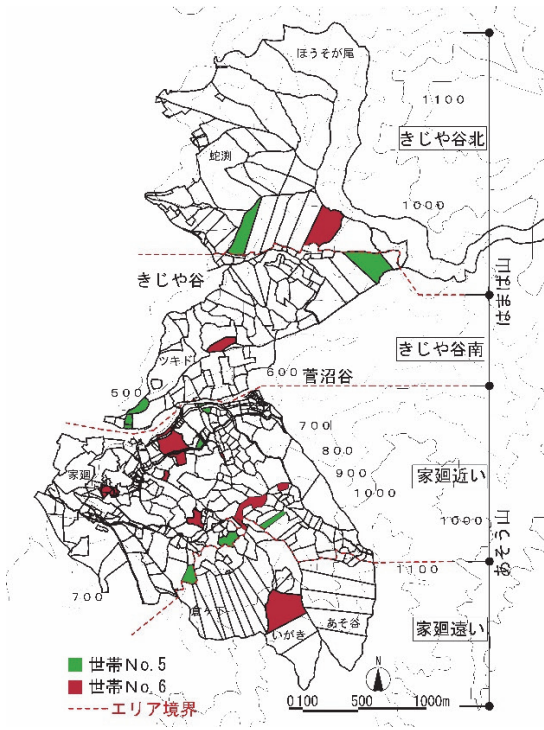


図6 世帯 No.5, No.6 の所有地

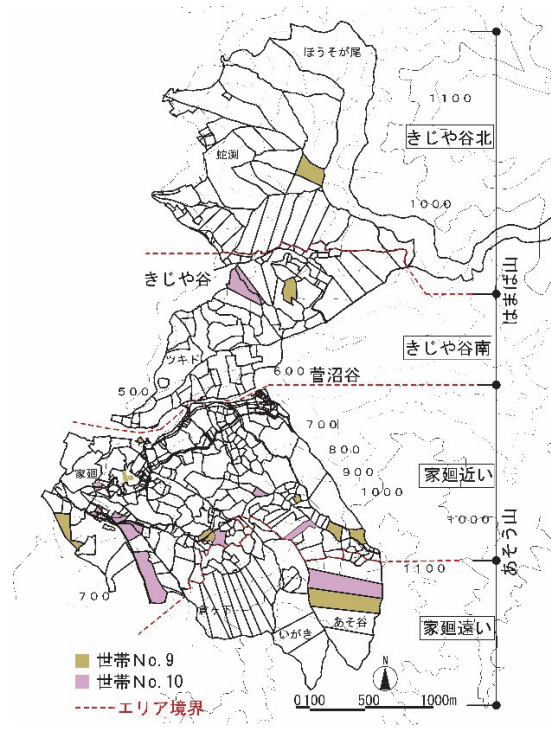


図8 世帯 No.9, No.10 の所有地

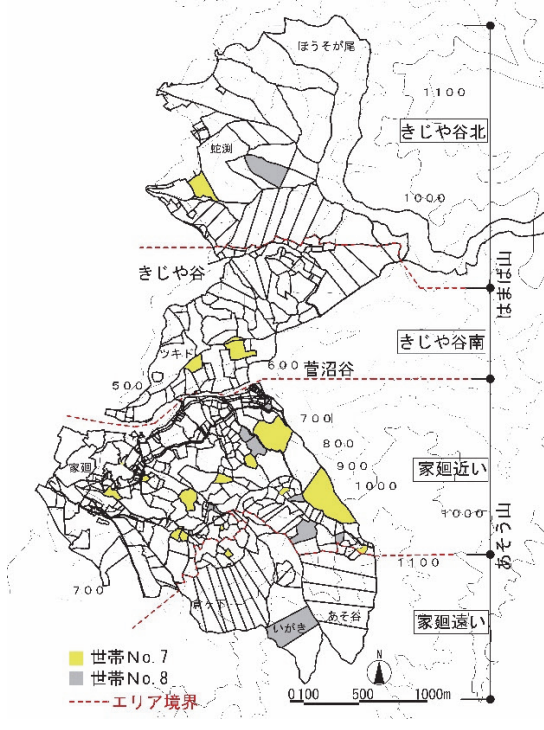


図7 世帯 No.7, No.8 の所有地

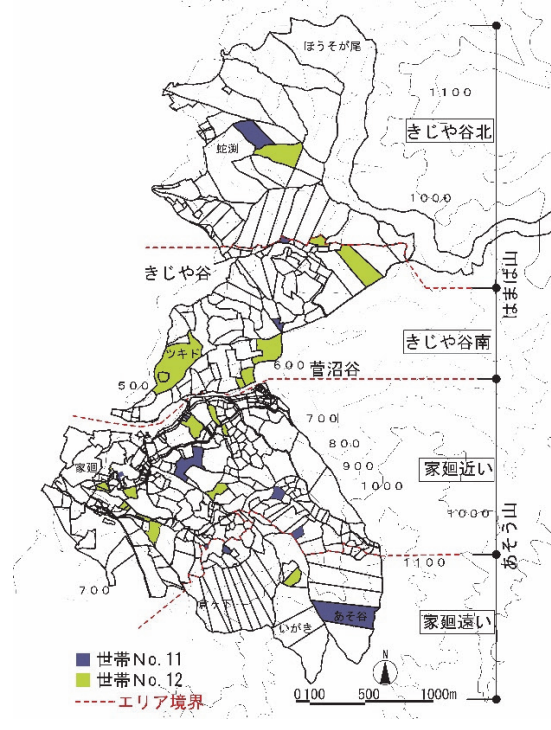


図9 世帯 No.11, No.12 の所有地

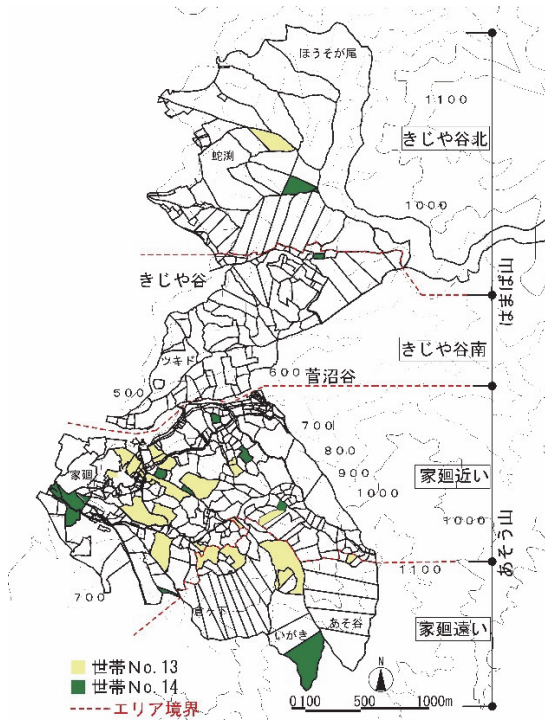


図10 世帯 No.13, No.14 の所有地

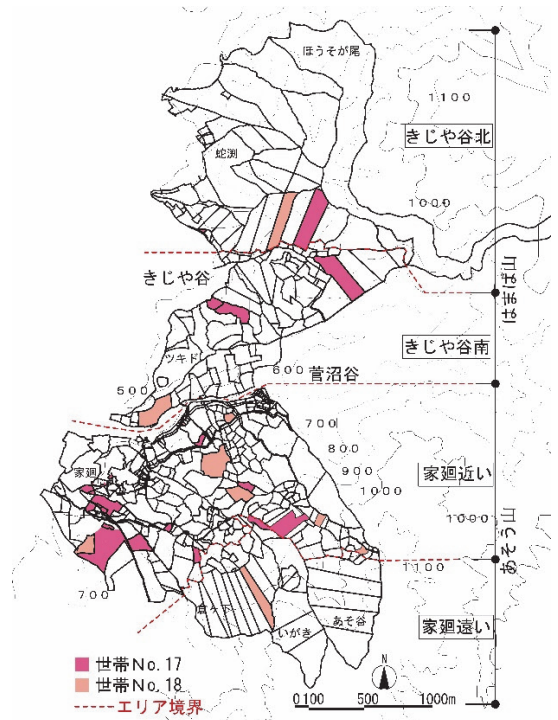


図12 世帯 No.17, No.18 の所有地

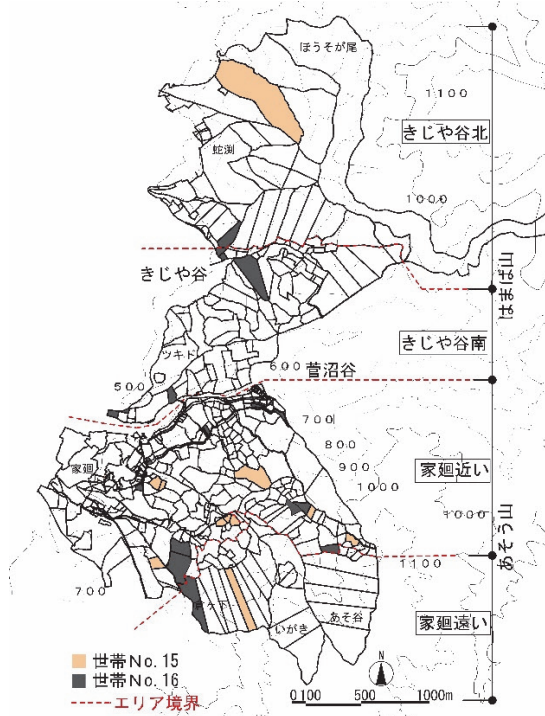


図11 世帯 No.15, No.16 の所有地

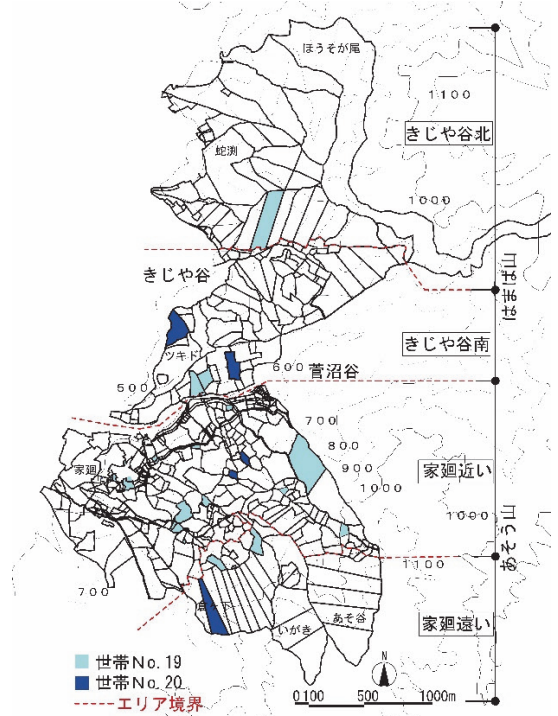


図13 世帯 No.19, No.20 の所有地

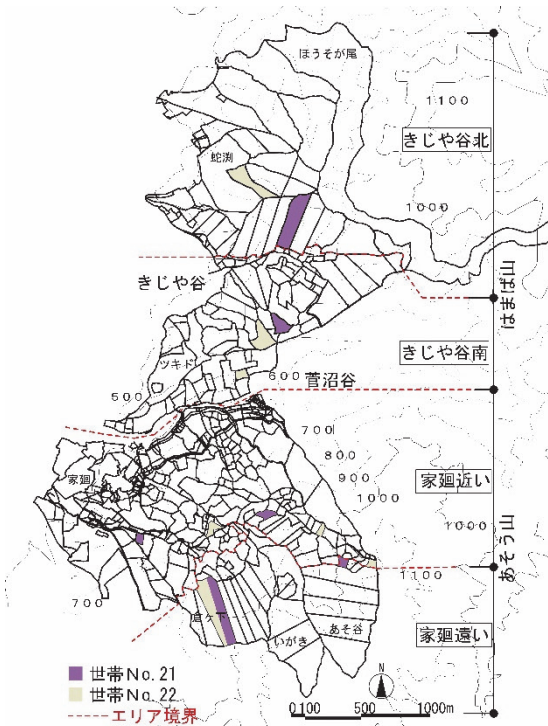


図14 世帯No.21, No.22の所有地

表1 エリア別各世帯の所有地の有無

世帯No.	あそう山		はまば山	
	家廻近い	家廻遠い	きじや谷南	きじや谷北
1	○	○	○	○
2	○	○	○	○
3	○	○	○	○
4	○	○	○	○
5	○	—	○	○
6	○	○	○	○
7	○	○	○	○
8	○	○	○	○
9	○	○	○	○
10	○	○	○	—
11	○	○	○	○
12	○	○	○	○
13	○	○	—	○
14	○	○	○	○
15	○	○	—	○
16	○	○	○	○
17	○	○	○	○
18	○	○	○	○
19	○	○	○	○
20	○	○	○	—
21	○	○	○	○
22	○	○	○	○
23	—	○	○	○
24	—	○	○	○

○所有あり—所有なし

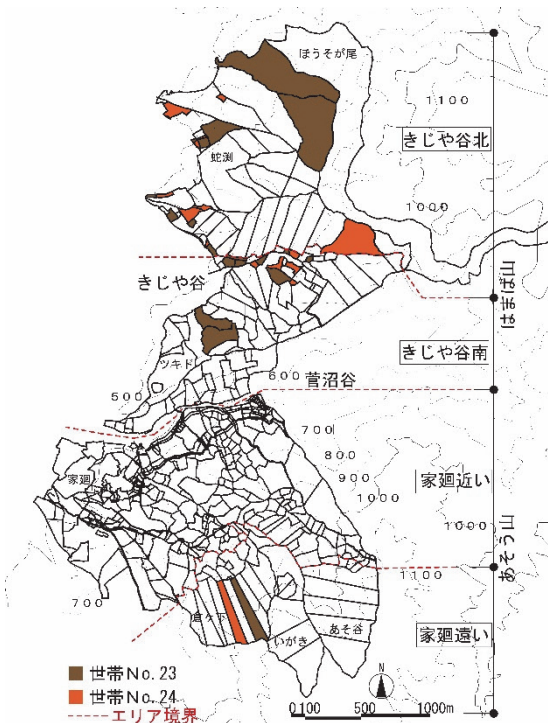


図15 世帯No.23, No.24の所有地

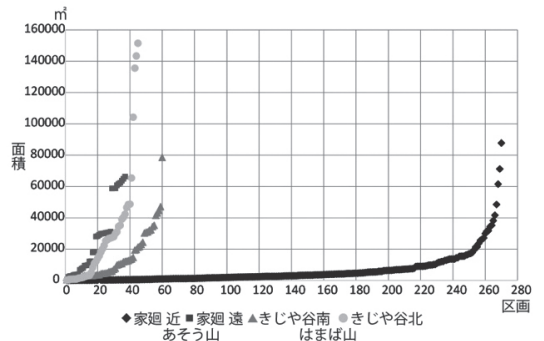


図16 エリア別区画ごとの所有地面積

有地面積を合計^{注6)}すると、あそう山の字家廻に近いエリアは1,689,441㎡、あそう山の字家廻より遠いエリアは991,139㎡、はまば山のきじや谷南エリアは849,209㎡、はまば山のきじや谷北エリアは1,307,847㎡である。

あそう山の字家廻より近いエリアは本研究対象世帯の所有地^{注6)}は270の区画があり、227区画が10,000㎡以下の所有地である。平均は約6,257㎡であり、比較的小さな面積の所有地が多く集まるエリアである。

あそう山の字家廻より遠いエリアは本研究対象世帯の所有地^{注6)}は37の区画があり、大きい区画面積では約50,000-60,000㎡程度があり、平均は約26,787㎡である。また本研究資料の測量図の作成時に共有地を登記するために線引きしたため直線で分割されている区画が多いことが分かる。

はまば山のきじや谷南エリアは本研究対象世帯の所有地^{注6)}は60の区画があり、大きい区画面積では約78,000㎡が一区画あり、平均は約14,153㎡である。また所有地は谷沿いの場所は比較的小さく分割され、標高が高い場所では本研究資料の測量図の作成時に共有地を登記するために線引きしたため直線で分割されていることが分かる。

はまば山のきじや谷北エリアは本研究対象世帯の所有地^{注6)}は45の区画があり、一区画の区画面積が比較的大きいことが分かる。また100,000㎡を超える大きな所有地が4区画あり、平均は約29,063㎡である。また、本研究資料の測量図の作成時に共有地を登記するために線引きしたため直線で分割されている区画も見られる。

4-3 共有地

聞き取りによると、昭和初期から戦後(1955年)頃の所有地は個人所有のものと、ナカマヤマ(共有地)があった。また各世帯の共有の所有地の有無により違いがあるが、「5ケンナカマ」「7ケンナカマ」「9ケンナカマ」「24ケンナカマ」等の呼称があり、少数の世帯の共有地と集落全世帯の共有地があったという。また種蔵集落では昔(明治以降と考えられる)から「ヤマワケ(山分け)」が行われており、その時々全世帯のナカマヤマから少数世帯のナカマヤマに分割される場合が

あったという。

4-4 土地利用からみた土地所有の考察

入会林野の利用に基づき4つのエリアについて考察を行う。入会林野の土地利用については既往研究で明らかとした1888(明治21)年の図3に基づき分析を行う。本研究対象時期は昭和初期から戦後(1955年)頃であるが、1888年の土地利用と研究対象時期の土地利用に大きな変化はなかったと考えられる^{注7)}ため、この史料を踏まえ、住民からの聞き取りによって補足することとする。

1) あそう山字家廻より近いエリア

このエリアは民家が建つ字家廻より谷を超えずに往来が可能な標高600-900mの場所である(字:宮ヶ洞、山ノ口、雪なし、かに沢、中のこびり、井ノコ谷、小あそ、下あそ、松ノ木山、谷の一部)。1888(明治21)年の土地利用を見ると、主に柴草山や焼畑があるエリアである。また住民からの聞き取りによると、馬の敷草を刈るカリバ(刈場)や屋根葺材の茅を採取した場所であり、字家廻から比較的往来がしやすいエリアであるため、所有意識が高い場所であると考えられ、長い年月の中で所有地が複雑に分割された結果、比較的小さい面積の所有地が多く集まると考えられる。

2) あそう山字家廻より遠いエリア

このエリアは、標高900-1,100mの場所である(字倉ヶ下、いがき、あそ谷)。1888(明治21)年の土地利用を見ると、焼畑、柴草山、木山として利用されていた。字家廻からある程度距離があるために頻繁に往来できる場所ではないが、生活に必要な場所であったと考えられる。所有地は、37区画を平均約26,787㎡で区画され、また所有境界が直線で分割されている場所がある。聞き取りによると、世帯No.9では、字あそ谷周辺は「5ケンナカマ」と呼ばれていた共有地があったという。測量図では所有境界が直線で5分割されており5世帯の共有林であったと考えられ、以前は一世帯の所有地に加え少数の世帯の共有地として利用された場所であると想定される。

3) はまば山きじや谷南エリア

このエリアは、標高500-900mで字家廻より菅

沼谷を超えた場所である（字：杉山、笹めき、ツキド、松尾、大平、前平、谷の一部）。1888（明治21）年の土地利用を見ると、柴草山と焼畑として利用されていた。聞き取りによると字家廻より近い場所ではカリバ（刈場）として利用していた世帯もあった。所有地は谷沿いの場所は比較的小さく分割されており、60区画を平均約14,153㎡で区画され、また所有境界が直線で分割されている区画がある。聞き取りによると、世帯No.4は字笹めき周辺に「5 ニングミ」と呼ぶ共有地があったという。測量図では所有境界が直線で5分割されており5世帯の共有地と考えられ、以前は一世帯の所有地に加え少数の世帯の共有地として利用された場所であると想定される。

4) はまば山きじや谷北エリア

このエリアは、標高500-900mで字家廻より菅沼谷ときじや谷を超えたエリアである（字：ほうそが尾、蛇淵、小丸山）。1888（明治21）年の土地利用を見ると、木山として利用されていた。このエリアの所有地は区画面積が比較的大きく100,000㎡を超える区画もあり、また所有境界が直線で分割されている場所もある。聞き取りによると世帯No.6は字蛇淵周辺に「7ケンナカマ」と呼ばれる共有地を所有していたという。測量図ではその周辺に7分割されているエリアを確認できる。また世帯No.7は字蛇淵に「9ケンナカマ」と呼ぶ共有地を所有していたという。以上より、以前は一世帯の所有地に加え少数の世帯の共有地として利用されていた場所であると想定される。

種蔵集落では聞き取りによると24ケンナカマと呼ばれる入会林野があり、全世帯で利用する共有地があった。本研究対象範囲では24分割されている所有区画を確認できなかつたため、これらは本研究で資料とした測量図では表されていない図2の研究対象範囲外のエリアに多く含まれると想定されることを補足する。

5. 結論

本研究は、山間集落である種蔵集落において、昭和初期から戦後（1955年）頃の各世帯の入会林野の土地所有を明らかにすることで入会林野の空間構成について考察することを目的とし、結論

を以下のようにまとめた。

- ① 各世帯は入会林野をエリアごとに分散所有していた。
- ② 比較的小さい区画面積の所有地が多く集まるエリアと中程度の区画面積のエリアと、大きな区画面積を持つエリアがあった。小さい区画面積の所有地が多く集まるエリアは、区画の多くが10,000㎡以下で一区画の平均が約6,257㎡であった。中程度の区画面積のエリアは、大きい区画面積では約50,000-78,000㎡程度があり、平均は約26,787㎡のエリアと約14,153㎡のエリアがあった。大きな区画面積のエリアは、100,000㎡を超える大きな所有地が4区画あり、平均は約29,063㎡であった。
- ③ 比較的小さい区画面積の所有地が多く集まるエリアは字家廻より近い場所（あそう山字家廻より近いエリア）であり、かつては焼畑や刈場、茅場があり、住民が頻繁に往来していた入会林野であった。中程度の区画面積の所有地を持つエリアは字家廻より谷を越えずに行くことができる標高の高い場所（あそう山字家廻より遠いエリア）や谷を1つ越えた場所（はまば山きじや谷南エリア）であり、かつては焼畑や柴草山があった場所であった。このエリアは一世帯の所有地と共に少数の世帯の共有地があった場所であり、共有地は測量図が作成されたときに登記のために線引きされたため直線にて区分けされ分割所有されていた。大きな区画面積の所有地を持つエリアは字家廻より2つの谷を越えた場所（はまば山きじや谷北エリア）で、かつては木山であった場所であった。このエリアは一世帯の所有地と共に少数の世帯の共有地があった場所であり、共有地は測量図が作成されたときに登記のために線引きされたため直線にて区分けされ分割所有されていた。

字家廻から近い入会林野は住民の往来が頻繁にあったエリアである。一方字家廻から離れた入会

林野は焼畑、柴草山、春木等の利用はあったものの人の往来が頻繁ではなかったと推測され、自然林に近い場もあったと考えられる。所有地は、字家廻から近い入会林野は小さい区画面積が多くあり、長い年月の中で所有が決まったと考えられ所有意識が比較的高い場所であると推察される。また字家廻から離れた入会林野の所有地は中程度から比較的大きな区画面積であり、共有地も多く含まれ、所有意識が比較的低い場所と推察される。そのような居住者の空間意識の異なる場が、主屋が立地する字家廻からの距離、標高、谷沿いなどの地勢や土地利用により、世帯ごとに段階的に広がって入会林野が構成されていると考えられる。

謝辞

調査にご協力を頂きました種蔵集落住民の皆様
に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 山田昌久他：飛騨山峡の人類史，東京都立大学考古学報告，1997-2003
- 2) 彌田徹，貝島桃代，土岐文乃：種蔵集落における土地構成と土地所有 - 種蔵集落における土地所有・利用からみた空間的特徴 (1) -，日本建築学会大会学術講演梗概集，pp.523-524，2011.8
- 3) 青柳由佳：岐阜県飛騨市種蔵集落における土地利用と土地所有からみた民家の配置 - 山間集落における集落空間構成に関する研究 -，日本建築学会計画系論文集，第81巻，第721号，pp.613-623，2016.3
- 4) 青柳由佳，樋口貴彦，小林久高：岐阜県飛騨市種蔵集落における入会林野の利用からみた民家の木材利用の変容，日本建築学会計画系論文集，第83巻，第744号，pp.219-229，2018.2
- 5) 吉城郡坂上村種蔵組全体略図，岐阜地方法務局高山支局，1888
- 6) 飛騨国中案内，かすみ文庫，1987.5.20
- 7) 宮川村誌編纂委員会：宮川村誌史料編，p.1163，pp.1211-1217，1981.11.20
- 8) 吉城郡坂上村種蔵組字絵図，岐阜地方法務局高山支

局，1888

- 9) 宮川村誌編纂委員会：宮川村誌通史編上/下/史料編，1981.11.20

注

- 注1) 作馬とは富山平野の農家に4月の初めから6月10日頃まで田仕事に馬を貸し出し、その貸付料として秋に作手間代として1頭につき米約5俵を受け取ることである。
- 注2) 参考文献5)を筆者が再作図し、研究対象範囲を示した。
- 注3) 参考文献4)より引用し英語表記を除いた。吉城郡坂上村種蔵組字絵図(岐阜地方法務局高山支局蔵,1888)は小字ごとに土地利用が記載されており、筆者が色分けして種蔵組全体略図に落とし込み、再作図したものである。
- 注4) 木山は山林とは区別して記述されているため、木山とは人が利用した山であると想定され、春木(薪)、炭焼材、用材を採取する山と推定される。春木をとる山を春木山と呼び、春木は薪のことで、養分や水分の吸収がなくなり木が乾燥した春に一年分の薪を用意し、秋から冬に山より運ぶ。
- 注5) 本研究では、現地の聞き取りで明らかとなった呼称をカタカナで表記する。
- 注6) 本研究で使用した測量図には一部に近隣集落世帯での所有地も含まれており、その区画については集計に入れていない。
- 注7) 参考文献4)によると、本研究対象範囲の入会林野において1844年と1888年の土地利用に関する大きな変化は見られない(本研究対象範囲外ではあるが、1888年には1844年には見られないシャウジ谷沿いに焼畑が点在する変化が見られた)。よって1955年頃までは焼畑の場所の移動や、刈場、茅場等の草生地の増減は想定されるものの大きな変化がなかったものと考えられる。1970-75年頃は植林が進み、2009年には全てが山林・保安林となっている。

(受付 2022.3.24 受理 2022.6.30)